

ローカル・センシティブなジェンダーと開発と男性

—私のジェンダー論—

熊谷 圭知

I 本稿の目的と概念の整理

1. 本稿の目的

本稿の目的は3つある。第1に、「ジェンダーと開発」というテーマに、私がいかにかかわってきたか、その試行錯誤の過程を示すこと、第2に、それらの議論の中で、男性および男性性（以下では男性／性）が占める位置について検討すること、そして第3に、「ジェンダーと開発」研究に、地理学／地域研究がどうかかわるのかを考えることである。これら3つは、相互に関連しており、私にとって現在進行形の課題である。したがって、本稿がめざすのは、明晰な結論を提示することではなく、問いを投げかけることである。

2. ジェンダーの概念

本稿の基本概念を整理しておこう。日本でジェンダーの語が現在のような意味で流通するようになったのは、1980年代の終わり頃からであり、その歴史は新しい。一般には、生物学的性差としての「セックス」に対し、社会文化的に構築された性差が「ジェンダー」であると理解されている。しかしこれだけでは、その含意は十分に言い表せない。男・女という二分法が強い力をもつのは、それが身体を背景に持ち、文化を超えた「自然」として了解されるからである。しかし、近年のジェンダー研究では、生物学的基盤の上に社会・文化的なジェンダーが構築されるのではなく、むしろ

社会・文化が身体に働きかけて、生殖上の差異を利用するととらえるようになっていく。男性学の主導者でもあるコンネルは、このような理解の上に、ジェンダーを次のように定義する。それは「性と生殖の舞台（reproductive arena）をめぐって構築される社会関係の構造であり、諸身体間の生殖上の区別を社会過程に関係づける（この構造に制御された）一連の実践である」（コンネル2008：22）。

伊田広行は、ジェンダー概念を4つの異なる意味水準で捉える（日本女性学会ジェンダー研究会2006：11-21）。第1に、単純に「性別」「性差」を示すものとして用いられる場合であり、第2に、上述のような、生物学的な性差と対比して広く用いられる「社会的・文化的に形成された性別、性差、男性・女性のあり方」としてのジェンダーである。この意味でのジェンダーはいわば価値中立的な概念であり、日本の男女共同参画基本計画の中で用いられるジェンダーについての政府見解もこのレベルである¹⁾。

第3に、「男／女はこうであるべきという規範」および「男女への社会的期待や処遇が差異化される参照・準拠枠組み」としてのジェンダーがある。このレベルでは、ジェンダーは、規範として人々の行動を規制する力を持つことになる。

第4に、性に関わる差別／被差別関係、権力関係・支配関係を示す概念としてのジェンダーである。この第4の視点は、第3の視点のジェンダー

を批判的に受け止め、性に関わる差別・支配関係の解消をめざすことを含むことになる。

この伊田の整理は、「ジェンダー」論が喚起する権力・政治的な含意の所在をよく示している。本稿でもこのような意味合いでジェンダーの語を用いたい。数年前にマスメディアで盛んに取り上げられた「ジェンダーフリー」教育をめぐるバッシングは、この第4の視点からのジェンダーの対象化に対する、第3の日本的なジェンダー規範を守ろうとする保守派からの反撥と抑圧の動きとして捉えることができる。そこで重要なのは、保守派の言説が常に男・女の区別を「自然」＝変わらぬもの（変わるべきではないもの）として表象し、その批判者たちがジェンダーを構築されたもの（可変的で多様性を含むもの）として論じていることだろう。

3. 開発の概念

Development の訳語として用いられる2つの日本語のうち、「発展」は自動詞、「開発」は他動詞である（エステバ 1996:25; 菊池編 2001:3）。つまり「発展」が自発的（内発的）であるのに対し、「開発」は外部からの働きかけによって生じる。後者は、しばしば批判的な意味合いで語られる。「脱開発」(post-development) 論者たちは、西欧先進国が、第二次世界大戦後、「開発」の観念を利用して、途上国を開発の欠如した状態、すなわち「低開発」と位置づけてきたこと、それにより「開発」は西欧諸国の優位を固定化する支配の言説として機能してきたことを批判している（ザックス編 1996; Escobar 1995）。

「開発」は、次の3つの意味を含むと私は考えている。第1に、もっとも狭義には、「開発援助」や「開発協力」のように、先進国による途上国への開発的介入（development intervention）を指す。第2に、資源のより効率的な利用を実現するという意味での「開発」がある。これは、経済開発、あるいは西欧的な近代化とほぼ同義で使われるこ

とが多い（Wills 2005）。第3に、もっとも広い意味での「開発」、すなわち、よりよき生活の実現をめざした実践とでもいうべきものがある。先進国主体の開発協力は、当然第2の意味を色濃く帯びる。われわれが「農村開発」や「地域開発」という時には、この2番目の意味合いと3番目の意味合いが重なり合っている。

重要な点は、「開発」が、主体や権力の問題にも関わることである。もともと development という言葉には、包み隠されているものを顕わにし、その可能性を引き出すという意味がある（西岡 1996:74）。したがって教育学・心理学における「発達」もまた development である。

チェンバース（1983=1995, 1997=2000）が提唱した「参加型開発」(participatory development) には、疑問や批判も提示されているが（たとえば Cooke and Kothari 2000; 佐藤 2005）、それが本来めざすのは、ミクロレベルの開発実践における権力の逆転である²⁾。そこには、開発実践が、援助国（西欧先進国）の政策決定者や専門家、途上国の官僚といった少数の力を持つ者の意思によって支配されていることへの痛切な反省がある。ロバーツ（1991）は、開発援助のもつ援助国中心の階層性の構造を痛烈に批判し、「開発」を「人々の間における権力のより平等な分配」と定式化し直している。

チェンバースとロバーツの議論を交差させるならば、もう一つの開発の定義が導き出されるだろう。すなわち、「開発」とは、（ミクロレベルの）主体形成をともなう、（マクロレベルを含む）権力関係の変革あるいは逆転の過程でもある（べき）という定式化である。「開発」がこのようなものとして実現しえたときにはじめて、よりよい生活の実現という意味での広義の「開発」実践が、西欧化や近代化の同義語から脱し、脱開発論者のいう西欧支配の別名にとどまらない可能性を帯びてくることだろう。それは、「ジェンダーと開発」の問題構制とも重なり合うと信じる。

II 私のジェンダー研究への関与

1. フェミニズム／ジェンダーとの出会い

私がフェミニズムやジェンダーに関心を持ったのは、1980年代半ばから（当時まだ「ジェンダー」という用語はなかったが）、上野千鶴子、江原由美子らの本を読んだことがきっかけだった（上野 1982, 1986, 1990；江原 1985；小倉 1988；落合 1989）。それは新鮮で刺激的なものだった。誤解を懼れずに言うなら、それは大学院に入って第三世界研究を始めたときに味わった衝撃に似ていた。私にとっては、自らに内在する西欧中心主義と男性中心主義の自覚とその克服は、自身の研究を（再）構築していく上で同じ方向性を持つものだった。

ただし当時の私の中には、この二つを直接結びつける視座は存在しなかった。第三世界は自らが研究者として追求すべき課題であり、いわば「公」的領域にあったのに対し、フェミニズムは自らの研究に関わるものとしてではなく、自分自身の生き方に関わる「私」的領域に属するものとして了解していたように思う。

私が初めて「ジェンダー」に関わる文章を書いたのは、1989年から故太田勇が主導して『地理』に連載された「エスニシティー・ジェンダー」という新シリーズのコラムの執筆者に加わったときである。私が担当した5回のうちの2回がジェンダーに関わるものだった（熊谷 1991, 1992）。限界はあるものの、このコラムでの論争の活発化と、日本の地理学界におけるジェンダーをめぐる議論の第一歩に資するものだったと思っている³⁾。

2. 開発と女性

私にとって、第三世界研究とジェンダー研究の両者を直接結び付けてくれたのは、第三世界の「開発と女性」(Women in Development : WID) をめぐる議論である。第三世界への開発援助政策や実践

が男性中心主義的なバイアスを持つことを批判し、開発の過程に女性を組み入れることを主張するこの議論は、後述するように、欧米では1970年代の半ばに端を発するが、それが日本で紹介されたのは、ようやく80年代の終わりのことだった⁴⁾。

1991年と92年の秋、当時の国立婦人教育会館で2年連続して「開発と女性」をめぐるシンポジウムが開かれ、私はそこに参加を申し込んだ。これは日本におけるこのテーマをめぐる議論の嚆矢となった会であり、日本側のパネラーや参加者にもこの分野を主導する研究者や実践者（JICAで「開発と女性」を主導する田中由美子氏ほか）が顔を揃えていた。

シンポジウムの内容ももちろん刺激的だったが、私にとって忘れられない出来事となったのは、91年のシンポジウム終了後、主催者側の企画で開催された参加者の意見交換会だった。主催者に指名された20名ほどの参加者（男性は私を含め2名だけ）の中で、私はこのような重要なテーマに男性の参加者が少なかったのは残念だと述べた。すると、関西の市民団体で活動する一人の女性から「ここは婦人教育会館なのだから、男性は男性教育会館でも作ってもらってそこで議論すればよい」という発言が返ってきた。私自身はジェンダーをめぐる議論の場に男性が少ないことへの違和感を「素朴に」表明したつもりだった。しかしその言葉は、女性が圧倒的多数を占めるその空間では、必ずしも共感をもって受け止められなかったのである。

その時私が抱いた（そして今も持ち続けている）疑問は、女性やジェンダーをめぐる議論が女性だけによってなされることが果してよいことなのかという思いだった。フェミニズム／ジェンダー研究が、女性による女性のための議論の空間にとどまってしまったとき、それは体制変革の力にはなり得ない、そしてそれを最も喜ぶのは現状を変えたくない主流派の男たちではないかという疑問で

ある(熊谷 1992)⁵⁾。しかし、同時にこれは男性がいかにかにジェンダーをめぐる議論の主体となるかという問題を喚起する問いにほかならない。

3. お茶大での教育研究

1992年4月からお茶の水女子大学に勤めはじめたことは、私にとって、ジェンダー研究を自らの課題として考える機会を与えてくれた。お茶大での私のジェンダー研究・教育への関わりには、次の4つの回路があった。

第1に、学部・大学院の地理学コースの研究教育である。私が赴任早々大学院で受け持った授業で使ったのは、地理学ではじめて本格的に第三世界の女性の問題を論じたテキスト『第三世界の地理学とジェンダー』(Momsen and Townsend 1987)だった。これには当時院生だった、吉田道代さん(現摂南大)、影山穂波さん(現椛山女学園大)、斎藤元子さんら、ジェンダーに関心を持つ院生たちが熱心に参加してくれた。その後、学部のゼミでも、「開発と女性」の古典といえるボゼラップの『経済発展における女性の役割』(Boserup 1970)を輪読した。また、授業以外の読書会では、澤滋久さん(現広島経済大)などインドネシア研究を専門とする他大学の院生にも呼び掛けて、アリソン・マレーの『ノーマネー・ノーハネー：ジャカルタの女露天商と売春婦たち』を読んだ。ジャカルタの貧困層の住宅地であるカンボンに住み込んでの参与観察に基づくこの書は、当時の助手の葉倩瑋さん(現茨城大)、インドネシア研究者の内藤耕さん(現東海大)との3人で、共訳書として木犀社から出版することができた(Murray 1991=1994)。

第2に、お茶大のジェンダー研究センターの開催行事(夜間セミナーや公開講演会など)への聴衆としての参加である⁶⁾。ジェンダー研究センター(Institute of Gender Studies : IGS)は、1975年にお茶の水女子大学に設立された女性文化資料

館に源を持ち、日本の女性学・ジェンダー研究の草分けとなる研究センターである。その後、1986年に女性文化研究センター、1996年にジェンダー研究センターへと発展した。

第3に、1997年に創設された大学院修士課程の「開発・ジェンダー論」コースの教員としての関わりである。同コースの創設には、私自身が発案者として関わっており、創立時の6名の教員中唯一の男性メンバーでもあった⁷⁾。同コースは、お茶大にはじめて「ジェンダー」の名を冠して作られた教育コースであり、ジェンダー研究への高い動機づけを持った多くの学生が学外からも集まる刺激的なコースとなった。

第4に、お茶大の21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア」の事業推進担当者としてのかかわりである。2003年度から5年間にわたり継続したこのプログラムは、法女性学を専門とする戒能民江氏を拠点リーダーに、総勢16名(学内13名、学外3名)の事業推進担当者により、4つのプロジェクト(「政策と公正」、「少子化とエコノミー」、「医療と身体」、「表象文化」)から構成された。

その中で私は、「政策と公正」の中の、一つのサブプロジェクトを担当した⁸⁾。私は、このプロジェクトを「ローカル・センシティブな『開発とジェンダー』政策の構築に関する研究」と名付け、開発・ジェンダー論コースの修了生で、お茶大で「ジェンダーと開発」をテーマにした博士論文を書いた倉光ミナ子さん(当時お茶大人間文化研究科助手。現天理大)と藤掛洋子さん(東京家政学院大)の二人の力を借りて研究会をスタートさせた。プロジェクトの企画・運営には、博士課程ジェンダー学際研究専攻在学中の院生たち(平野恵子さん、木村オリエさん、鳥山純子さん、中村雪子さん、太田麻希子さん、ほか)、および開発ジェンダー論コースの在生学生たち(西張由希子さん、ほか)も積極的な役割を果たしてくれた。後に述べるように、この21世紀COEプログラム

へのサブプロジェクトの主宰者としての関与を通じて得た試行錯誤の経験と考察が、本稿をなす直接の動機となっている。

III 第三世界のジェンダーと開発をめぐる議論

1. WID から GAD へ

前述の通り、第三世界の開発論の中で、女性／ジェンダーへの注目が生まれるのは、1970年代以降のことだが、その直接の契機は、1975年の国際婦人年と、それに続く国際婦人の10年である。その背景には、欧米先進諸国におけるフェミニズム運動の成果がある。

もう一つの背景は、1970年代以降、開発論の潮流の中で、近代化論的開発への批判が生まれたことである。これにより、人間の基本的必要(Basic Human Needs)という観念が提唱され、工業化やインフラ整備から、保健衛生や住宅、教育の改善などに焦点が当てられるようになった。こうした社会開発分野における成果を求めようとするとき、女性を対象とした働きかけは不可欠となった。

「開発における女性」(WID)の理論的支柱となったのが、経済史家のボゼラップ(地理学者にとっては、『農業成長の諸条件』(Boserup 1965)の著者として名高い)の『経済発展における女性の役割』(Boserup 1970)である。彼女は、多数のモノグラフに依拠しながら、女性中心的農業システム(サハラ以南アフリカで支配的な焼畑農耕)と、男性中心的農業システム(北アフリカや西アジアで支配的な犁農耕)を析出した。そしてより多くの肉体労働を必要とする後者では女性が農業労働から撤退し、こうした農業生産における女性の経済的価値の低下が、北アフリカや西アジアの男性優位の社会制度の物質的基盤となることを指摘した。ボゼラップはまた西欧の植民地支配の中で、男性=生産労働/女性=家内労働という二分法が持ち込まれ、それに基づく政策が実施されることによって、女性の経済的地位が低下したこと

も強調している。経済史家であるボゼラップの議論には、発展段階論的・経済決定論的な性格が強い。しかしその議論は、具体的な地域に根ざした実証的なものであり、そこには大文字の「第三世界女性」は登場しない⁹⁾。

WIDでは、女性を開発過程に正当に組み込むことが提唱され、女性の雇用や所得創出の機会、教育機会を与えることが重視された。しかし、こうした政策や実践は、しばしばジェンダー役割の固定化や女性の過重負担を招くことになった。こうした反省をふまえて、1980年代以降、新たに展開したのが「ジェンダーと開発」(Gender and Development: GAD)の考え方である。GADの中では、女性を男性との関係性の中で捉え、ジェンダーの不平等を解決するには男性を含めた支配的な社会構造の変革が不可欠であること、また、能動的な主体としての女性が力をつけることが重要なこと、などが主張されている(Moser 1993=1996; 田中・大沢・伊藤 2002)。そこでは、既存のジェンダー関係を前提とした「実践的ニーズ」だけでなく、そうした構造を変革する「戦略的ニーズ」の構想・実現も期待されている¹⁰⁾。

2. 「ジェンダーと開発」研究の展開

広義の「ジェンダーと開発」にかかわる研究の動向の一部を紹介してみよう。焦点は、第1に「家族」「世帯」であり、第2に「雇用」と「労働」である。

WIDの中では、女性は常に「家族」(family)、「世帯」(household)を支えてきたし、支えるべきものであると期待される。そこには既存のジェンダー役割が反映されている。

主流派の新古典派経済学では、「家族」や「世帯」の中身はブラックボックスのままだった。それを始めて対象化したのが、1960年代に登場した「新家庭経済学」(new household economics)である。そこでは、世帯員は世帯全体の効用・厚生を最大化のために共同して行動し、世帯の意思決定を行

なう家長(男)は、世帯員のために「利他的」に行動するという前提が置かれていた(久場 2002)。

この新古典派的な新家庭経済学の世帯観への批判の議論を展開しているのが、社会経済学者のカビア(Kabeer 1994)である。カビアは、世帯がもつ資源としての世帯員の労働時間の分配が、統一的な世帯の総意に基づいてなされるという新家庭経済学の仮定を批判する。そこでは女性が家事労働に専念することが世帯によって選択されるのは、女性の市場労働への対価が男性よりも低い(比較優位)からであると合理化されている。しかし女性の市場労働への参加が増しても、女性の再生産労働は代替されない。そこには、ジェンダーに関わる社会規範が妨げとなっている(Kabeer 1994: 105)。カビアは、新古典派経済学に基づく世帯員間の交渉(bargaining)モデル(世帯への貢献度が世帯員の交渉力を規定する)においても、交渉力の差異の背後にある構造に目を向けていないと批判する(ibid.: 109)。

これに代わり、西アフリカのガンビアとバングラデシュにおける文化人類学研究に依拠しながら、カビアが指摘するのは、「世帯」の構造が大きく異なることである。バングラデシュでは、女性の家庭外での活動を制約するパルダ規範の下で農業労働や市場生産への女性の貢献は弱く、家父長の権力が強い「統合的」世帯であるのに対し、ガンビアでは、妻も異なる畑と家産を持ち、「分散的」世帯である。前者では、世帯の意思決定は家父長によってなされ、妻はそれに従属するが、後者では、妻は独立した意思決定を行ない、資源へのアクセスの力も大きい。新古典派経済学が世帯員個人の問題に還元してしまう交渉力の差異の背後には、こうした文化に根ざす世帯の構造と、権力のジェンダー格差の問題が横たわっている(Kabeer 1994: 126-133)。

第2は、グローバル化の中で、女性の賃金労働への参入が増大する中で、その雇用をどのように評価するかという問題である。

世界市場向けの製造業での女性労働の増大をめぐって議論を提起したのが、エルソンとピアソン(Elson and Pearson 1981)である。こうした工場では、「器用な指先」(nimble fingers)を持ち、従順で、忍耐強く働く若い女性を選好されるが、そこでは手先の器用さが女性にとって自然に身につけられた(訓練費用を必要としない)特質であるというジェンダーバイアスの上に、家族を養う必要のない若い女性の低賃金と超過搾取が許容されてしまう。したがって、エルソンとピアソンは、工場労働がもたらす女性の「解放」には限界があると評価した¹¹⁾。

これに対し、こうした研究が、働く女性自身の声を欠落させたまま、第三世界の女性を「犠牲者」として描く図式に陥りがちなことを批判するのがウルフである(Wolf 1992)。彼女は、インドネシア、ジャワの農村の工場と世帯の参与観察の上に、工場働く女性たち、工場の雇用、女性の家族、世帯内関係の間に、複雑でダイナミックな相互作用が存在することを指摘する。ウルフは、若い女性たちが世帯主の管理下で家族の犠牲になって働くというような図式は当てはまらず、工場労働が世帯内での地位を上げ、消費においても結婚相手の選択においても自由を獲得していることを指摘している。そこには(研究者が想定するような)統一的な「世帯戦略」などは存在しない。

前述のカビアは、『選択する力』と題された近著で、グローバル化にともなう女性労働と世帯との関係を詳細に分析している(Kabeer 2000)。彼女が取り上げるのは、バングラデシュの首都ダッカで縫製工場に就業する女性労働者と、ロンドンでアパレル産業の下請け内職に従事するバングラデシュ移民女性たちである。両者を対比し、カビアは、女性の行動への規制が弱いはずのロンドンの移民女性より、公的領域への現前が制約されているダッカの女性工場労働者の方に、積極的な変容の態度を見出ししている。

その背景には、ロンドンの移民女性たちの階層

が高く、家族呼び寄せでやって来た既婚女性が多いため、ジェンダー規範の拘束が強いことがある。これに対し、ダッカの女性工場労働者は、より貧しい（人口密度が高く土地なしが多い）地域から都市にやってきた移住者であり、未婚女性が多く、宗教的な規範が比較的緩い。カビアは、ライフストーリーの手法で多数の女性労働者たちの語りを収集し、工場労働に就く動機・契機の様相を明らかにし、彼女たちの「選択」の背後に何があるかを分析している。それによれば、彼女たちが労働市場に出るかどうかは、家族（母・妻）としての義務への顧慮と関わっている。賃金労働に従事することは、男性が稼ぎ手で女性が屋内に隔離されるというジェンダー規範を壊すことであり、彼女たち自身にも抵抗が存在するが、縫製工場での労働が「女性」のものとして社会に認識されていることが、それを和らげている。また経済的利益の獲得（家族の生活水準の向上、教育費の稼得）が動機にみえる場合でも、非経済的動機（家庭内での従属的な地位にまつわる屈辱をはらすといった）も関連している（Kabeer 2000 : 82-141）。

カビアの批判はここでも、人間行動の説明において選択の重要性を強調しながら選択する力の不平等には触れない主流派経済学に向けられる。他方で（マルクス主義のような）構造主義理論は、個人の選択への社会的制約の大きさを強調するが、その制約の中で個人がいかに戦略的に事を運ぶか（そしてその過程の中で制約を変化させるか）については認識しようとしなない。カビアが志向するのは、主体を否定せずに構造を認めることであり、現実には両者の相互作用の中で、女性たちの労働市場での決定がなされる。このアプローチの中では、女性労働者は、新古典派的な意味でのアトム化された個人ではなく、「関係性の中の個人」(person-in-relations) にほかならない（Kabeer 2000 : 327）。

3. 「ジェンダーと開発」実践の隘路

上述のような「ジェンダーと開発」研究の展開と進化の一方で、開発的介入（開発援助）の枠組みとしての「ジェンダーと開発」は、転機に差しかかっている。2003年7月に、サセックス大学の開発学研究所 (Institute of Development Studies: IDS) で行われたワークショップに基づく「ジェンダーと開発にフェミニズムを再定位する」と題されたIDS Bulletinの特集（Cornwall, Harrison and Whitehead 2004）では、この分野に関わって来たフェミニスト研究者・実践者たちの苛立ちが表明されている。

そこに示されるのは、「ジェンダーと開発」に込められたフェミニストの社会変革の願望と、達成された成果との間のギャップである（Cornwall, Harrison and Whitehead 2004 : 2）。そこには、主に2つの問題が指摘されている。第1に、「ジェンダーと開発」の概念や枠組みの単純化・本質化への危惧であり、第2に、グローバル／ナショナル・レベルの政策におけるジェンダー主流化が進まない現実への懸念である。両者は密接に関連している。

たとえば、ある特定の場所に根ざした教訓が、スローガン化した一般性に転じてしまい、女性が犠牲者、開発の受動的対象として、あるいは逆にヒロインとして表象されてしまう。こうした一般化の結果、現実の女性の変化は政策に届かない。「開発言説の中で、女性と貧困が同一視されるほど、多くの女性の経験が貧困の陰に隠れてしまうほど、そしてジェンダーが主流化されるほど、私たちは重要な政策空間や書類の中に効果的なジェンダー平等政策を見いだせなくなってしまう。官僚や政策決定者に、ツールや枠組みやメカニズムの形で表象されることによって、『ジェンダー』は本来の政治的意図が中立化されてしまい…誰もが何をすべきか知っているようなものになり…『ジェンダー』の話になると、皆がため息をつく」（Cornwall, Harrison and Whitehead 2004 : 1）のである。援助機関が作り出す「ジェンダーレシピ」(ジェ

ンダーと開発に関する政策・実践の定型化された処方箋)は、西欧中心主義的な本質を持っており、異なる文化の文脈における女性や男性の生きられた経験や関係の現実をとらえ損なってしまっている (ibid.: 4).

上述のワークショップ参加者たちは、こうした開発政策の中のジェンダーをめぐる言説が一定の成果を挙げてきたことを認めつつも、その形骸化や脱政治化への懸念を共有している。それは「ジェンダーを実践すること」が何か安全なことになってしまい、「フェミニズムを実践すること」から離れてしまう、という懸念である (Cornwall, Harrison and Whitehead 2004:8)。その上に立って、著者らが結論づけるのは、異なる立ち位置を持つフェミニズムの思想家、ジェンダーと開発の活動家の間の、差異にセンシティブな連携の必要性である (ibid.: 9)。

日本においても、ジェンダー主流化の名の下に、逆に開発援助機関の中でジェンダー専門家を育成する空間が狭まるという事態が起こっている (2007年10月13-14日、国立民族学博物館で開催された「開発とジェンダー」シンポジウムにおける JICA の鈴木陽子氏の報告より)。そこには、日本社会全体における「ジェンダー」へのバックラッシュに加え、公的機関の中でジェンダーへの関心が形骸化し、減退していることが作用しているように思われる。また開発実践者と研究者の間の相互交流の少なさ、意識のギャップも見逃せない。その結果、開発的介入としての「ジェンダーと開発」の視点・手法が定型化して、現実社会への訴求力を失ってしまっているという問題が存在するからだ。こうした課題を考えようとしたのが、21世紀 COE プログラムのプロジェクトだった。

IV お茶大 21 世紀 COE プロジェクトにおける 実践

お茶大の「ジェンダー研究のフロンティア」に、

そのサブ・プロジェクトとして「ローカル・センシティブな開発とジェンダー…」を立ち上げた個人的な動機には、現在の「ジェンダーと開発」の枠組みが、しばしば普遍主義的・西欧中心主義的な傾向をもつことへの地理学者/地域研究者としての違和感があった。すなわち、当時の私の認識は「ジェンダー・センシティブであることは、必ずしもローカル・センシティブではない」(これを命題1とする)というものだった。

これは、第三世界のフェミニストたちが、西欧フェミニズムによって構築された「第三世界女性」という表象に対して行なう異議申し立て (Mohanty 1991) と、(その動機は異なるが) 重なり合う方向性を持つ。上記の思いは、第三世界をフィールドとする若手のジェンダー研究者 (院生を含む) で構成されるこの研究グループに、程度の差はあれゆるやかに共有されていた認識だった。

しかし、2004年7月に開催した第1回の公開研究会の中で、「ローカル・センシティブな開発とジェンダー」の概念について論じられる中で、コメンテーターを務めた伊藤るり氏からこの概念への違和感が表明された。すなわち (既存のローカルな社会・文化の構造が、ジェンダー不平等を作り出している中で) 「ローカル・センシティブであることは、必ずしもジェンダー・センシティブではない」(これを命題2とする) のではないかという疑念である。

「ジェンダーと開発」(GAD) が、ジェンダー不平等を作り出す社会・文化の構造の変革をめざす中で、これは当然の疑問だった。「ローカル・センシティブ」であることが、ローカルな社会の文化相対主義的な理解から、その現状肯定 (少なくとも是認) へと向かうとすれば (それは地理学者/地域研究者が陥りがちな志向性であるが)、それは、既存の社会・文化に根ざすジェンダー規範・関係から利益を得ている支配階層、男たちの利益に与するものにほかならないからだ。これは

ジェンダー不可視な地域研究のあり方への根源的な批判でもあった。以降のプロジェクトの活動の中では、この二つの命題をいかに止揚するかが大きな課題となった。

2005年1月に開催した、「ジェンダーの視点から開発の『場所』を考える——開発実践者・研究者のコラボレーションをめざして」と題したワークショップは、このプロジェクトの目的のひとつである、研究者と開発実践者が議論を共有する場をつくるものだった。そこでは、公募を含む8人の若手研究者・実践者が報告を行ない、4人のゲスト——田中由美子氏（JICA）、日下部京子氏（アジア工科大学大学院）、遠藤貞氏（東京大）、藤掛洋子氏——が報告とコメントを行なった（熊谷ほか編 2005）。

議論の中では、（タイトルとは裏腹に）このテーマをめぐる研究者と実践者の間のギャップも明らかになった。たとえば、両者を流れる時間の違い（研究者は10～20年、時には一生かけてフィールドに付き合うが、開発プロジェクトはせいぜい5年間で終了）や、フィールドの位置づけ（研究者にとっては全体的かつ固有のものだが、実践者にとっては「特殊」では意味がなくケースやモデルでなければならない）などである。

全体討論では、若手の男性文化人類学者の「開発実践者はトップダウン志向であり、ローカルの論理を分かってほしい」との発言に対し、一人のフェミニスト研究者が（この分野の先駆者であるゲストとこれまで苦労して切り拓いてきた議論の空間に対しての）非礼さに激昂するという場面もあった。対立線は、研究者と実践者の間だけでなく、ジェンダー研究者と地域研究者の間にも引かれていた。この議論を経て、私があらためて獲得した反省的認識は、上記の二項対立を乗り越えるためには、地域研究者が、ローカルの内部者としての自らを特権的に標榜しつつ、「ジェンダーと開発」の実践を外部から超越的に批判することは不適切であるということだった。

そして辿り着いたのが、「ローカル・センシティブな開発とジェンダー」とは、「研究者・実践者が、自らのフィールドに根ざして、『開発』（外部からの開発的介入を含む、生活改善をめざした実践とそれによる変化）と結びついたジェンダー再編のダイナミズムを捉えることである」（命題3）という認識だった。

「開発」という概念・言説が西欧中心的なシステムであり、第三世界のローカルな社会の自立性を奪ってきたことを認めるとしても、その解放を外部と切断されたローカルの自律や抵抗に期待することは、ロマンティズムであり、いわば裏返しの西欧中心主義に陥る危険がある。グローバルな開発の観念や実践はすでにローカルの一部を構成しており、ローカルなジェンダー関係の再編の中には、開発的介入という契機をはじめ、グローバル/ナショナルな言説や資源を動員したり、翻訳したりすることが含まれる。現代のローカルな日常世界の中でジェンダーの問題を捉えようとするれば、ローカルにとっての「外部」が内部化され、言葉やふるまいとして身体化されるプロセスを、主体（女性・男性）の認識と重ねあわせながら記述していくことが求められる。それは、地域研究のあり方の再構築にもつながるはずと考えるに至った。

この認識に基づいて、私は、同僚の石塚道子氏、三浦徹氏（イスラム史）、荒木美奈子氏（開発学）、棚橋訓氏（文化人類学）らとともに、「ローカル・センシティブな『開発とジェンダー』研究をめざして」というタイトルで、2005年秋に科研費を申請し、2006年度に採択された。実質メンバーには、窪田幸子氏（広島大）、中谷文美氏（岡山大）らジェンダー人類学を主導する研究者、村山真弓氏（アジア経済研究所）、池田恵子氏（静岡大）、江藤双恵氏（独協大ほか）、小國和子氏（日本福祉大）、藤掛洋子氏、倉光ミナ子氏らジェンダーと開発実践の双方に造詣の深い研究者に加わってもらった。この科研メンバーのネットワークと議

論は、私にとって大きな刺激と資源となった。

2007年1月に開催した国際ワークショップ(「差異を超えて—アジア・太平洋の文脈からのジェンダーと開発の再定位」)では、科研メンバーに座長を務めてもらい、3名の海外からのゲスト・スピーカーを招いて、12名の若手研究者・実践者が報告した(Kumagai et al. eds. 2008)。若手の報告が、自らのローカルなフィールドにおける研究・実践を論じるものだったのに対し、3名のゲスト——ルース・ピアソン Ruth Pearson(イギリス、リーズ大学開発学センター所長: 経済学)、マリー・ジョン Mary John(インド・ニューデリー、女性開発学センター所長: 哲学)、クリスティ・ポエルワンダリ Kristi Poerwandari(インドネシア、インドネシア大学、女性学専攻プログラム長: 心理学)——の報告はいずれも、グローバル化の中で生じる新たなジェンダーと開発の課題を論じるものだった。そこでは、グローバル化する経済の中で増加する女性の雇用の評価(ピアソン)、インドのフェミニストの間でのグローバル化への評価の多様性(ジョン)、スハルト後のインドネシアにおける、反グローバル化と新たなナショナリズムの基盤としての、イスラム的なジェンダー規範の強化(ポエルワンダリ)、などが指摘された。

報告はいずれも熱のこもったもので、とりわけサブプロジェクトの平野さん、木村さん、中村さん、鳥山さんは、企画、当日の運営や通訳、報告の3役をこなして活躍した(資料1)。ゲストたちは、若手の報告に、丹念で的確なコメントを寄せてくれた。

最後の全体討論の場で、ゲストから提起されたのは、私たちが第三世界に関わる際の位置性の問題だった。日本人研究者・実践者が第三世界のフィールドに赴いて研究・実践をする時、その視点と方法に欧米といかなる差異があるのか? また、そこから得た知見を、日本の現実にとどのようにフィードバックするのか? という問いである。これは、われわれに欠落していた視点であり、そ

の場では、十分な解答を構築することはできなかった。そこから得られた課題が、「自らの調査研究/開発実践の場所と自らの生活する場所をつなぐ、インター・ローカルあるいはマルチ・ローカルな認識と実践の必要性」(命題4)だった。

以下では、この視点によりながら、開発と男性/性の問題を検討してみたい。



資料1 国際ワークショップ(2007年1月, お茶の水女子大学)のポスター(中村雪子作成)

V 「ジェンダーと開発」と男性/性： 日本の場合

1. 議論の背景

すでに述べたように「開発と女性」(WID)が「ジェンダーと開発」(GAD)に発展したとき、単に女性にだけ焦点を当てるのではなく、関係としてのジェンダーが問題にされるはずだった

(Moser 1993:3). しかし、実際には、男性はGADの阻害要因として問題視される一方で、その現実の姿は見失われてきた。こうした中で、イギリスでは、1990年代後半以降、「ジェンダーと開発」に男性を包摂するという議論が提起されている(Cornwall and White 2000; 熊谷 2006, 2008). そこには、前述したような「ジェンダーと開発」をめぐる実践とその成果の行き詰まりという状況関わっている¹²⁾.

なぜ「ジェンダーと開発」の中に、男性を包摂することが必要なのか。そこには、大きく4つの理由が見出される(熊谷 2008:209-211).

第1に、ジェンダー主流化という課題である。そのためには、援助機関における政策形成の場においても、途上国の開発実践の現場においても、男性をどう組み込むかという課題が重要なものとなる(Chant and Gutmann 2000).

第2に、開発実践の現場からの要請である。女性だけを対象にしたプログラムは、排除された男性たちの疑念や敵意を呼び起こしてうまくいかないことがしばしばある。HIV-AIDSの問題やリプロダクティブ・ヘルスのように男性を組み入れることによって効果的に行われるようなプログラムもが存在するし、またコミュニティの女性たち自身がそれを求める場合もある。

第3に、第三世界フェミニズムの影響や、ポスト構造主義やアイデンティティの政治といった議論によって、「女性」が一枚岩ではないのと同様「男性」を単一で普遍的・本質的なカテゴリーとすることの問題性が認識されるようになったことである(Cornwall 2000).

これまでの「ジェンダーと開発」では、男たちは、もっぱら「問題」として、変化に抵抗する存在としてしか描かれてこなかった。しかし、すべての男たちが「覇権的男性性」(Connell 1995)の体現者ではないし、それぞれの文化的コンテクストにおいて男性性が権力と結びつくありようは変化する。男性の個人の経験に根ざす差異にアプローチ

することにより、男たちが自らの認識や行動を見直し、積極的に変えていく機会が生まれる。そこにはGADにおける男性との協働の可能性が開けている(Cornwall 1997:11-12).

第4に、グローバル化や新国際分業の進展、構造調整策などの結果として、世界的レベルで、労働力の女性化が進行する一方で、男性の雇用が失われていることである。これは、これまで男たちの拠り所だった、一家の「稼ぎ手」(breadwinner)としての男性という地位やアイデンティティが脅かされていることを意味する(Chant and Gutmann 2000). それによって生じる男性/性の危機は、犯罪や暴力といった社会問題の深刻化にもつながる。

もちろん、グローバル化が負の影響をもたらすのは、男性に対してだけではない。途上国・先進国を問わず、資本の自由化と新自由主義的な国家政策の普遍化の中で、構造調整政策や民営化にもなる雇用の削減と非正規化、性別を問わない雇用の細分化・(企業にとっての)柔軟化と、労働対価の切り下げが進行している。しかし、その影響が男性にとって特別な意味をもつとすれば、それまで(相対的に)安定した職と賃金を保証され、一家の稼ぎ手となりえていた(そしてそこに自らのアイデンティティと権威を依拠していた)男たちの地位の低下が生じていることであり、その落差の大きさにある。

この状況は、日本においてもあてはまる。以下では、近年の日本の状況を、ジェンダーと開発と男性/性という視点から考察してみよう。

2. 日本の経済社会の変化と男性/性の危機

日本では、周知のとおり、1990年代後半以降、若年層における非正規雇用の増大が著しい。その背景には、グローバル化の中での企業の労働コスト削減の要請と、それに応えた政府(小泉自民党政権)による新自由主義的な経済改革がある。とりわけ1999年の労働者派遣法の改正は、それを

大きく押し進めることとなった。その結果生じた格差や貧困の問題は、この数年の間に、日本社会全体の問題として認識されるようになり、2009年夏の政権交代の最大の要因のひとつとなったことは間違いない。ここで検討したいのは、格差や貧困問題一般ではなく、こうした変化の影響をもっと強く被っていると考えられる若年世代、とりわけ男性の問題である。

「パラサイトシングル」「ニート」「引きこもり」といった用語が登場した時、若年層、とくに男性の労働市場への参入の低下を、彼らの意欲や適応能力の低下、家族への依存の増大の問題としてとらえる見方が支配的だった(山田 1999; 斎藤 1998; 宮本 2002; 小杉 2003; 三浦 2005 ほか)。この課題はすでにジェンダー化されていた。すなわち結婚して、賃金労働に従事し、家族を養うという男性のジェンダー規範からの逸脱が(もっぱら主体にその責めを負わせる形で)問題にされていたのである。

これに対し、新自由主義的な経済改革の犠牲者として彼らを描き、経済・社会の構造を問題にする視点が提示され(本田・内藤・後藤 2006; 門倉 2006; 熊沢 2006; 橋木 2006; 岩田 2007 ほか)、現在では、こうした見方が主流といえる。これらは構造を(批判的に)問題にする立場であり、いわば主体から構造へのシフトが生じている。主体の視点は相対的に希薄なこれらの議論の中にあって、本田由紀らの著(本田編 2007)は、コンビニで働く/ケアワークに従事する/ストリートダンスに興じる/ホームレスの…多彩な若者の生活世界とその声が提示されており貴重である。しかし、標題に象徴されるように、その主体は「若者」であり、ジェンダーの差異は問題にされていない。

日本の労働(「主婦」の労働も含めて)のあり方がジェンダーと切り離せない構造を持ってきたことを考えれば、こうした対象化は不十分である。中野麻美は、日本における非正規雇用のあり方が、

いかにジェンダー化されてきたかを的確に指摘している(中野 2006)。非正規雇用の特質は、「短時間労働性」「雇用の有期性」「雇用の間接性」にあり、本来それ以上でもそれ以下でもない。にもかかわらず、それがダンピング可能な低賃金不安定雇用となってしまうのは、日本では非正規雇用が女性の「家計補助的賃金」(パートタイム労働)と位置づけられ、雇用や労働のあり方を論じる議論から疎外されてきたためである。

日本における非正規雇用がジェンダー化された「女の労働」、「女並みの働き」であり、家族の扶養を前提としない低賃金が正当化されてきたとするならば、問題の根源が明らかになってくる。この対極には、男性＝正社員＝「過労死」を厭わない長時間労働の甘受、という構図があることはいうまでもない。資本による労働の細分化と密度の強化、非正規と正規の分断と前者における過重労働の強要という状況(雨宮 2007)の中で、多くの若年男性が、死ぬほど働いて妻子を養うか(斎藤 2009)、「女並みの」賃金に甘んじて結婚をあきらめるかという不毛な二者択一を迫られている¹³⁾。フリーターが消極的な選択肢であった(ありえた)とすれば、そこには日本におけるジェンダー化された労働のこの極限の二項対立への拒絶がある¹⁴⁾。

ここでもう一つ指摘すべきは「家族」の問題である。「パラサイトシングル」「ひきこもり」には日本的な家族のありようと、その限界が映し出されている。非正規労働とワーキングプアの増大にもかかわらず、その貧困がそれほど大きく可視化しないのは、家族が最低限のセーフティネットを提供しているからだ。100万人に上るといわれる「ひきこもり」の問題も、息子と母という関係が相対的に多いことが知られ、ジェンダー化された現象である(斎藤 1998; ジーレジンガー 2007)。問題は、「家族」の崩壊が喧伝され、社会の矛盾を押しつけられている現代の「家族」・「世帯」の中身が不可視なことだ。そこには、「公的

領域」(市場化された労働)と「私的領域」(家族内の無償の再生産労働)という二分法が強く働いている。その結果、母親世帯主世帯(シングルマザー)についていえば、就ける職が非正規雇用に限定され、子供の病気で休みを取ることも困難で、自身の健康維持もままならないという苦境が、家族崩壊というスティグマをとまなないながら増幅されている¹⁵⁾。

「ジェンダーと開発」研究が問題にした「労働」と「家族」(世帯)というテーマは、日本でも、ジェンダーを結び目としながら、相互に関連して存在していることがわかる。

必要なのは、非正規雇用の現状、女性(そして若者)の「家計補助的」労働、低賃金、正規雇用现就く男性との賃金格差の容認という構図の背景にある、ジェンダー化された労働の脱構築である。非正規雇用を、資本によるフレキシブルな労働力搾取の手段に委ねさせるのではなく、フレキシブルで多様な働き方=生き方の資源として再定位するための要件は何だろうか。同一価値労働同一賃金(ペイ・エキティ)の原則や、フルタイムとパートタイムの相互転換制(経営者の都合ではなく)労働者の権利として確立すること、生活保護の窓口規制の緩和、最低賃金の引き上げなどを通じたセーフティネットの強化(熊沢 2007)は、その要件であることは間違いない。あるいは、近年注目されているベーシックインカム(ヴェルナー 2007; 山森 2009; 山田 2009)も検討の余地がある。そのためには、国・地方自治体・労働組合・NGO・NPO等による相互交渉の空間が不可欠だろう¹⁶⁾。

それに加えて検討されるべきは、もはや「稼ぎ手としての男性」という性役割モデルに固執できないフリーター/ニート世代の男性性の再編が、どのような方向へと向かうのかということだ。そこには様々な可能性が見いだせる。

男女雇用機会均等法以降、労働市場の中で「女性に蹴落とされ」、結婚相手としても選び取って

もらえない男たち(三浦 2007)のルサンチマンを背景にした、ジェンダー・バッシングや、反「フェミナチ」という形でのフェミズムへの敵意表明がみられる。これは、男性間の格差の隠蔽とホモソーシャルな「男同士の絆」の再構築といえる(海妻 2005, 上野ほか 2006)。「新しい歴史教科書をつくる会」のように、(プチ)ナショナリズムに癒しを求めたり(小熊・上野 2003)、戦争と暴力の夢想による性・世代間格差のリシャッフルに期待する志向性(赤木 2007)も、これに関連する。ナルシスト的な消費主義(ハーヴェイ 2007)の追求や、生身の他者との関係性の回避による「オタク化」の進行(斎藤環 2000; バラール 2000; 中野 2004; 北田 2005)も有力な選択肢だろう。それとも「だめな男たち」(脱力系)の自己肯定(だめ連 1999)や、「草食系男子」という形で、男性性の脱構築をめざすのだろうか。逆に、「婚活」に抵抗し、女性嫌悪(ミソジニー)による結婚の回避と、男性としての自己保存の道を歩むのだろうか(兵頭 2009)。

あるいはワークライフバランスへの志向性や、育児の権利(育時連 1995)、「主夫」の選択を通じて(藤岡 1999)、オルタナティブなパートナーシップを目指そうとするのか。そうした男たちの実践は、家族やケアの問題をジェンダー不平等の源泉として対象化するだけでなく、それを突き抜けてケアを「情緒的で倫理的な同調」(attunement)として捉え直し(コーネル 2005: 52)、ケアと依存の私事化による過剰負担のため奪われている「ケアする権利」(牟田 2006: 227)を取り戻して、公私二元論と「自律的個人」の幻想をともに越え他者とのつながりによって刻印される自己を再定位しようとする(岡野 2005)フェミニズムの議論の重さに応答するだけの当事者性を備えうるのだろうか。

この新しいジェンダーの視点からの親密圏と公共圏の再構築(斎藤純一 2000)は、これからの日本社会を考える鍵になるテーマのように思われ

る。おそらく最悪のシナリオは、若年男性たちが、自らの排除を、他者(女性や移民)への憎悪や暴力による排除にすり替えて自己確認を行なうことだろう。存在論的な不安は、他者の「悪魔化」と暴力的排除に向かいがちだ(ヤング 2007)。家事労働や看護・介護といったケアワークに従事する再生産労働力としての女性の国際移動は、東アジアを含め世界中で生じており、インドネシア、フィリピンからの介護労働者を受け入れはじめた日本も例外ではない(伊藤・足立 2008; 国際移動とジェンダー研究会 2009)。国際結婚の増大という現実(安里 2009)も含めて、ジェンダー関係・規範の再構築と新しいシチズンシップの構想は、切り離しえない課題であるように思われる(鄭 2003; 土野 2003; 岡野 2009)。

これらの多様な新しいテーマには、現実の場所と空間の問題が深くかかっている。公的空間と私的空間の二分法を超え、これまでフェミニズム地理学を除いては十分に取り上げてこなかった「ホーム」(福田 2008)の内部まで含めた、居場所と新たな公共空間の生成過程(岩田 2008; 稲葉 2009; うてつ 2009ほか)を考察することは、日本の地理学にとっても重要な課題となるだろう。

VI 差異を越えて

日本のジェンダー・労働・家族をめぐる課題は、日本という空間の中だけでは完結しえない。資本と労働のグローバル化の中で、われわれの社会と空間・場所を構成する要素が多元化し、われわれの世界と彼/女らの世界の相互依存が強まる中、距離と差異を超えた共通性・相同性の発見と、連携の可能性が模索されねばならない。

第三世界女性という表象の持つ西欧中心性を鋭く指摘して、フェミニズムに大きな影響を与えたモハンティは、新たにグローバル資本主義への抵抗運動としての南と北の「共有される差

異」(common difference)という観念を提起している(Mohanty 2003)。西欧中心的・文化相対主義的(ポストモダン)な学問と教育が、後期資本主義の論理に容易に絡めとられてしまうのは、それが一見して脱中心化と差異の累積の論理だからだと彼女は言う。これに対して、モハンティが提唱するのは、歴史的・文化的に固有な「共有される差異」のパラダイムを分析と連帯の基礎とするような比較フェミニスト研究/フェミニスト連帯モデル(comparative feminist studies/feminist solidarity model)である(ibid.: 523-4)。

ここから浮かび上がってくるのは、ローカル・センシティブな開発とジェンダーの第5の命題、すなわち「グローバルな資本主義によるジェンダーの再編の中で、グローバリズムと排他的ナショナリズムの双方に抗うことを通じて、私たちの世界と彼/女らの世界の協働・共闘関係を構想していく」という課題である。グローバル資本主義の下で削減され切り下げられる雇用・賃金をめぐって競争・相克関係にある「北」の女性・男性たちと、「南」の女性・男性たち(移民を含む)の連帯・共闘という課題(Murayama 2005: 250)は、しかし容易な作業ではない。たとえばカビアは『選択の力』の中で、人権擁護の体裁を取った第三世界の(女性や子供の)搾取的労働への批判が、実は先進国の労働組合等の既得利害を守るためのものにすぎないことを鋭く批判している(Kabeer 2000: 364-404)。しかし、「貧困」と排除を克服する方法としての、湯浅らが言う「溜め」の力(湯浅・仁平 2007)と、ヌスバウムが示す「人間の中心的なケイパビリティ」(ヌスバウム 2005)の実現には、日本、インドという場所を超えた相同性を確かに感じる。

そこで鍵になるのは、私たちがいかに他者に向きあい、「他者化」を超えた理解を構築していけるかということだろう。「他者化」とは、「自己」を構築するために、「他者」を、自らとは異質の、変わらぬものとして構想する実践であるというこ

とができる。男性が、女性を「他者化」（その中には矮小化もロマン化も同時に含む）することによって自己構築してきたことは言うまでもない。同時に、フェミニズムからの「男性」へのまなざしにも他者化が含まれている。

この自己と他者の二項対立を乗り越え、開かれたダイナミックな他者理解をめざしていくためには、彼我の「差異」を厳然と見据えつつ、「相同性」と「共同性」（協働の可能性）を見いだすことが求められる。これはとてつもなく大きな課題である。しかし、フェミニズム地理学者／フェミニストエスノグラファータたちのフィールドワークをめぐる省察と実践が多くの示唆と励ましを与えてくれるように思う（Nast 1994；Kobayashi 1994；Wolf 1996；中谷・宇田川 2007）。

ナストは、次のように語る。「間にあること (betweenness) は、わたしたちが、自分たちと切り離された異なる「他者」と共同しえないなどということはない、という事実を強調することになる。差異は、あらゆる社会的相互作用の本質的側面である。そして社会的相互作用とは、わたしたちがいついかなる時も、間にあること、すなわちわたしの世界と、わたしのものでない世界を乗り越えていくことを求めるものなのだ」（Nast 1994：57；下線は引用者）。

グローバル化の中で進行する事態は、労働力という資源の（資本にとっての）より効率的な利用という意味では「開発」のひとつである。それをいかに労働／生活する者の側に引き寄せ、よりよい生の実現という意味での「開発」に近づけていくかという根源的な課題がある。そのためには、グローバル、ナショナル、ローカルのすべてのレベルにおける権力（ジェンダーも含む）の逆転と主体の形成が必要だろう。「ローカル・センシティブな開発とジェンダー」構築のための第3、第4、第5の命題は、その一つのシナリオである。そこで地理学／地域研究がなすべきこと、なしうることは少なくないはずだ。

注

- 1) 日本の地理学におけるジェンダーの用いられ方は、フェミニズム地理学の立場に立つ少数の研究者を除けば、この第2の意味水準までにとどまっているように思われる。
- 2) 私は、2005年4月から7月まで、チェンバース氏の所属するサセックス大学の開発学研究所に客員研究員として滞在した際、彼の主宰するワークショップに参加する機会を得た。サンダル履きの気取らぬ姿で、丸1日のワークショップを朝早くから一人で準備して実行し、ロールプレイなどを通じ徹底して「力を持つ者」が「力を持たない者」の立場や心情を理解することができるといかに難しいかを説く彼の姿に、強く印象付けられた。世界銀行さえも参加型開発を採用し、その形骸化が指摘される中で、チェンバース氏自身参加型開発のマニュアル化を何より嫌っており、そのジレンマや苛立ちも同時に感じた。
- 3) 最初の原稿（熊谷 1991）では、同コラムでの「ジェンダー」をめぐる議論が男性中心に展開されていることへの違和感と、自らの地域研究が男性中心的な視点で書かれてきたことへの反省を重ね合わせて、地理学における「女性の視点」への期待を論じた。これは、日本の地理学界に「ジェンダー」の問題を果敢に提起しようとした主宰者の太田勇への（太田自身の挑発に乗った形での）批判を含むものだった。この論考に対しては、太田勇（1992）、丹羽弘一（1992）、村田陽平（Murata 2005）から男性のジェンダーをめぐる議論への関与のあり方をめぐり批判的なコメントも受けた。しかし、私はジェンダーの問題は女性に委ねるべきという主張をしたわけではなく、男性優位の地理学の中で、男性が女性をも代弁＝表象してしまう危うさを指摘したつもりである。
- 4) JICAに、「環境女性課」が創設されるのは1989年のことである（このネーミングは、はからずも「環境」と「女性」という二つのテーマがいかに日本の開発援助の中で周縁化されていたかを象徴し

ている)。アメリカの援助庁 (USAID) が、女性の視点の採用を援助政策に組み入れるのは 1976 年のことだから、この間 13 年というギャップがある。このような日本の援助政策における「女性」への注目の遅れについては、二つの要因が挙げられる。第一に、日本の開発援助がインフラの整備など、技術的・工学的な分野に偏っており、それらはジェンダー中立的なものとして見なされた (それらの学問分野ではジェンダーの視点は不在だった) ことであり、第二に、日本のフェミニズム運動と開発援助の関わりが希薄だったことである。村山真弓は、日本のフェミニズムの主流に、アジアをはじめとする第三世界への視点が欠落していたこと、またアジアと関わる運動を展開したフェミニストたち (たとえば「アジアの女たちの会」など) には、日本の ODA に対する批判的な視点が強く、そこに積極的に影響を及ぼそうとはしなかったことを指摘している (Murayama 2008)。

- 5) しかし考えてみれば、普段の男性中心的な議論の場、男性主体の言説空間に、男性である私は何ら違和感を持ってこなかった。私が突きつけられたのは、日常生活世界において、男たちが、男性／女性というジェンダーの非対称性・権力性への気づきいかに鈍感であり、それを認めたがらないか (認めなくても済んできたか) という問いである。そのような構造に対する異議申し立ての手段あるいはプロセスとして、女性による女性のための議論の空間を創出することにもフェミニズム／ジェンダー研究のひとつの意味があったとすれば、そうした構造への反省と自己批判を経由することなしに、ジェンダーをめぐる議論の「公共空間」を構想することはできないだろう。
- 6) IGS は、毎年 2 名程度の海外のジェンダー研究者を客員教授として数ヶ月間招き、夜間セミナーと題した公開の連続講義を提供していた。講師は毎回の講義につき数本の英語論文を資料として配布し、講義は英語 (通訳付き) で行われた。講師の中には、タン・ダム・トゥロンやトリン・ミン

ハなど、私も名を知る人物も含まれていた。しかし前学長によって研究センターの予算が削減され、客員研究員制度と夜間セミナーは現在行われなくなってしまっている。

- 7) お茶大に来て数年たった頃、当時の学部長の学部改革への試案募集に応じて提起したのが、「開発ジェンダー論」コースだった。その後、この案は学際的な大学院再編の焦点として日の目を見ることになった。開発・ジェンダー論コースには、学部の地理学コースから 2 名 (私と栗原尚子氏。後に石塚道子氏に交替)、ジェンダー研究センターの原ひろ子氏 (文化人類学。後任は伊藤るり氏)・館かおる氏 (女性学)、文教育学部の教育学コースで文化人類学担当の田中真砂子氏 (後任は波平恵美子氏、棚橋訓氏)、生活科学部生活社会科学コースの篠塚英子氏 (労働経済学。後任は永瀬伸子氏) が参加した。
- 8) このサブプロジェクトの発案者は、ジェンダー研究センターの原ひろ子氏の後任で、開発・ジェンダー論コースの中核となっていた伊藤るり氏であり、同コースの教育への還元が意図されていた。伊藤氏は、自らが主宰する「国際移動と再生産領域の再編成」サブプロジェクトに専心するため、同コースのメンバーであり、まだ自らのプロジェクトを持っていなかった私に主宰者が委ねられることになった。
- 9) これに対し、GAD のひとつの枠組みを提供した Moser の『ジェンダー計画と開発』(1993) (邦訳: 『女性・開発・NGO』, 1996 年) では、冒頭に「ジェンダー計画が目指すのは、女性の従属からの解放であり、その平等・公正・エンパワーメントの達成である」(Moser1993:1) と語られ、第三世界の女性が普遍的なモデルとして提示されているという印象が強い。
- 10) ただし、WID から GAD への進化が、ただちに現実の援助プロジェクトの性格の変化をもたらしたわけではない。JICA などでも、GAD 案件といえるのは、女性の問題を担当する省庁 (ナショナ

ル・マシナリー)への専門家派遣などが主なもので、プロジェクト案件の大部分は、女性のための栄養改善プログラム、所得向上プロジェクトなど、実践的ニーズの充足という性格が強く、WIDの範疇に入るものが多い。これは、途上国のジェンダーに関する社会構造の変化をめざすGADの性格が、援助対象国の文化への「干渉」になり構想しにくいことも作用している。

- 11) ピアソンは、その後、自分たちの所説を再考した論文の中では、かつての議論を修正し、第三世界の工業化のあり方にも地域差がみられるとして、自分たちが第三世界の工業化と女性労働を一律のものとして描きすぎたことを認めている(Pearson 1998)。また工場労働という集団的な機会が、これまでとは異なるジェンダー役割や期待をもたらす可能性を指摘している(ibid.: 184)。
- 12) 「ジェンダーと開発」に男性を包摂するという議論が、すべてのGAD研究者・実践者に支持されているわけではない。ホワイト(White 2000)が述べるように、そこには、さまざまな逡巡や葛藤が存在する。その背景には、資源配分の問題(GADに割り当てられた限られた予算を男性のために使うことの是非)や、男性への焦点化が依然として根強い女性の構造的不平等から目をそらすことになるという懸念がある(熊谷 2006, 2008)。
- 13) もちろんそのことは、それまで子育てや家族のケアのためにキャリアを中断したり、パートタイムの職に甘んじたりすることを余儀なくされてきた女性たち、「一般職」と「総合職」という不可解な二分法の下で、男性と「一般職」女性双方からの厳しい視線にさらされながら、男たちが依拠する職場外でのインフォーマルなコミュニケーションによるネットワークからも疎外され、独力で闘わねばならないキャリア女性たち、の葛藤を軽視するというのではないし、あってはならない。
- 14) 「フリーター」の側からの、現場からの現状報告を越えた立論として、杉田俊介(2005)、生田武志(2005)の議論は、説得力を持つ。

15) シングルマザーの貧困と周縁化は、アメリカでも著しい(シプラー 2007を参照)。フェミニズム法学者のファインマンは、社会変化が家族に与える影響とその責任を問題にせずに家族の崩壊のみを社会問題として捉えることを批判する。そして、シングルマザーを逸脱者とする枠組みである異性愛単婚家族の規範に基づく法的な婚姻制度を廃止し、ケアを提供する者とそこに依存する者という関係性の単位(彼女はそれを象徴的な意味で「母子」と呼ぶ)に対して国家が再分配を行なうという、ラディカルな家族再編を提案している(ファインマン 2003)。

16) 湯浅誠・稲葉剛らの「NPO 自立生活センターもやい」をはじめとするNPOの活躍は、まだ兆しにすぎないものの、新自由主義と自己責任論を超える枠組み作りの可能性を作りだしているように思える(湯浅・仁平 2007; 湯浅 2008; 稲葉 2009)。一方「派遣村」の報道に対し、お茶大の開発ジェンダー論コースの一人の院生は、そこに「男しか見えない」ことを批判した。日本において貧困が広く男性のものになった時、はじめて社会の関心が集まったという側面があることは否めない。

文 献

- 赤木智弘 2007. 『若者を見殺しにする国——私を戦争に向かわせるものは何か』双風舎。
- 雨宮処凛 2007. 『生きさせろ——難民化する若者たち』太田出版。
- 安里和晃 2009. 家族化政策と人の国際移動. 国際移動とジェンダー研究会編 135-151.
- バラール, E. 著, 新島進訳 2000. 『オタク・ジャポニカ——仮想現実人間の誕生』河出書房新社。
- Boserup, E. 1965. *The Conditions of Agricultural Growth*. London: Allen & Unwin.
- Boserup, E. 1970. *Women's Role in Economic Development*. New York: St. Martin's Press.
- Chambers, R. 1983. *Rural Development: Putting the Last First*. Longman. チェンバーズ, R. 著, 野田

- 直人訳 1995. 『第三世界の農村開発 貧困の解決——私たちにできること』明石書店.
- Chambers, R. 1997. *Whose Reality Counts? Putting the First Last*. London: ITDG Publishin チェンバース, R. 著, 野田直人・白鳥清志監訳 2000. 『参加型開発と国際協力——変わるのはわたしたち』明石書店.
- Chant, S., and Gutmann, M. 2000. *Mainstreaming Men into Gender and Development: Debates, Reflections and Experiences*. Oxford: Oxfam Working Papers.
- Cooke, B., and Kothari, U. eds. 2000. *Participation: The New Tyranny?* London: Zed Books.
- コンネル, R. 著, 多賀太監訳 2008. 『ジェンダー学の最前線』世界思想社. Connell, R. 2002. *Gender*. Cambridge: Polity Press.
- Connell, R. W. 1995. *Masculinities*. NSW: Allen & Unwin.
- コーネル, D. 著, 岡野八代・牟田和恵訳 2005. 『女性たちの絆』みすず書房.
- Cornwall, A. 1997. Men, masculinity and 'gender in development', *Gender and Development* 5(2):8-13.
- Cornwall, A. 2000. Missing men?: Reflections on men, masculinities and gender in GAD, *IDS Bulletin* 31(2):18-27.
- Cornwall, A., and White, S. C. eds. 2000. Men, masculinities and development: Politics, policies and practice, *IDS Bulletin* 31(2):Institute of Development Studies.
- Cornwall, A., Harrison, E., and Whitehead, A. 2004. Introduction: Repositioning feminism in gender and development, *IDS Bulletin* 35(4):1-10.
- だめ連 1999. 『だめ連宣言』作品社.
- 江原由美子 1985. 『女性解放という思想』勁草書房.
- Elson, D., and Pearson, R. 1981. Nimble fingers make cheap workers: An analysis of women's empowerment in Third World export manufacturing, *Feminist Review* 7:87-107. 神谷浩夫訳 2002. 器用な指先が安い労働力を生み出すのだろうか? 第三世界の輸出製造業における女性雇用の分析. 神谷浩夫編監訳 『ジェンダーの地理学』古今書院, 218-244.
- Escobar, A. 1995. *Encountering Development: The Making and Unmaking of the Third World*. New Jersey: Princeton University Press.
- エステバ, G. 著, 三浦清隆訳 1996. 開発. ザックス編: 17-41.
- フラインマン, M. A. 著, 上野千鶴子監訳, 速水葉子・穂田信子訳 2003. 『家族, 積みすぎた方舟——ポスト平等主義のフェミニズム法理論』学陽書房.
- Fineman, M. A. 1995. *The Neutered Mother, the Sexual Family and Other Twentieth Century Tragedies*. New York: Routledge.
- 藤岡 良 1999. 『「主夫」っていいかも——「男らしさ」のしがらみを超えて, 気楽に元気に生きる本』彩流社.
- 福田珠己 2008. 「ホーム」の地理学をめぐる最近の展開とその可能性—文化地理学の視点から. 人文地理 60(5): 403-422.
- Haraway, D. J. 1991. *Simians, Cyborgs, and Women: The Reinvention of Nature*. London: Free Association Books, ハラウェイ, D. J. 著, 高橋さきの訳 2000. 『猿と女とサイボーグ——自然の再発明』青土社.
- ハーヴェイ, D. 著, 渡辺 治ほか訳 2007. 『新自由主義——その歴史的展開と現在』作品社.
- 国際移動とジェンダー研究会編 2009. 『アジアにおける再生産領域のグローバル化とジェンダー配置』一橋大学社会学研究科・伊藤り研究室.
- 本田由紀・内藤朝雄・後藤和智 2006. 『「ニート」って言うな!』光文社.
- 本田由紀編 2007. 『若者の労働と生活世界——彼らはどんな現実を生きているか』大月書店.
- 兵頭新児 2009. 『ぼくたちの女災社会』二見書房.
- 育児連(男も女も育児時間を!連絡会) 1995. 『育児で会社を休むような男たち』ユック舎.
- 生田武志 2005. 『〈野宿者襲撃〉論』人文書院.
- 稲葉 剛 2009. 『ハウジングブア——住まいの貧困と向き合う』山吹書店.
- 伊藤り・足立真理子編 2008. 『国際移動と〈連鎖するジェンダー〉——再生産領域のグローバル化』(ジェンダー研究のフロンティア2), 作品社.

- 岩田正美 2007. 『現代の貧困——ワーキングプア／ホームレス／生活保護』筑摩書房.
- 岩田正美 2008. 『社会的排除——参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣.
- Kabeer, N. 1994. *Reversed Realities: Gender Hierarchies in Development Thought*. London: Verso.
- Kabeer, N. 2000. *The Power to Choose: Bangladeshi Women and Labour Market Decision in London and Dhaka*. London: Verso.
- 鄭 暎恵 2003. 『〈民が代〉 斉唱——アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』岩波書店.
- 門倉貴史 2006. 『ワーキングプア——いくら働いても報われない時代が来る』宝島社.
- 海妻猛子 2005. 対抗文化としてのく反「フェミナチ」>——日本における男性の周縁化とバックラッシュ. 木村涼子編『ジェンダー・フリー・トラブル——ハッシング現象を検証する』現代書館, 35-53.
- 加藤秀一 1996. 『性現象論——差異とセクシュアリティの社会学』勁草書房.
- 菊池京子編 2001. 『開発学を学ぶ人のために』世界思想社.
- 北田暁大 2005. 『嗤う日本の「ナショナリズム」』日本放送出版協会.
- Kobayashi, A. 1994. Coloring the field: "race" and the politics of fieldwork, *Professional Geographer* 46(1):73-80.
- 国際移動とジェンダー研究会編『アジアにおける再選再領域のグローバル化とジェンダー再配置』一橋大学.
- 小杉礼子 2003. 『フリーターという生き方』勁草書房.
- 久場嬉子 2002. ジェンダーと「経済学批判」——フェミニスト経済学の展開と革新. 久場嬉子編『経済学とジェンダー』明石書店, 17-49.
- 熊谷圭知 1991. 「男性優位」の地理学に必要な女性の視点. 地理 36(12): 14-16.
- 熊谷圭知 1992. 第三世界の開発と女性をめぐる. 地理 37(7):73-75.
- 熊谷圭知ほか編 2005. 『ジェンダーの視点から開発の「場所」を考える——開発実践者・研究者のコラボレーションをめざして』(F-GENS Publication Series 10) お茶の水女子大学.
- 熊谷圭知 2006. 「ジェンダーと開発」における男性の位置. F-GENS ジャーナル 5: 178-187.
- 熊谷圭知 2008. 「ジェンダーと開発」における男性の位置・再考, 戒能民江編著『国家／ファミリーの再構築——人権・私的領域・政策』(ジェンダー研究のフロンティア 1) 作品社, 207-229.
- Kumagai, K. et al eds, 2008. *Beyond the Difference: Repositioning Gender and Development in Asian and the Pacific Context* (F-GENS Publication Series 32), Frontiers of Gender Studies, Ochanomizu University, Tokyo.
- 熊沢 誠 2006. 『若者が働くとき——「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず』ミネルヴァ書房.
- 熊沢 誠 2007. 『格差社会ニッポンで働くということ——雇用と労働のゆくえをみつめて』岩波書店.
- 三浦 展 2005. 『下流社会——新たな階層集団の出現』光文社.
- 三浦 展 2007. 『下流社会 第2章——なぜ男は女に“負けた”のか』光文社.
- 宮本みち子 2002. 『若者が「社会的弱者」に転落する』洋泉社.
- Mohanty, C. 1991. Under Western eyes: feminist scholarship and colonial discourse. In *Third World Women and the Politics of Feminism*, eds. C. T. Mohanty, A. Russo and L. Torres, Bloomington: Indiana University Press.
- Mohanty, C. 2003. "Under Western eyes" revisited: feminist solidarity through anticapitalist struggles, *Sign: Journal of Women in Culture and Society* 28(2): 499-535.
- Momsen, J., and Townsend, J. 1987. *Geography and Gender of the Third World*. London: Hutchinton.
- Moser, C. O. N. 1993. *Gender Planning and Development: Theory, Practice and Training*. London: Routledge. モーザ, C. 著, 久保田賢一・久保田真弓訳 1996. 『ジェンダー・開発・NGO——私たち自身のエンパワー

- メント』新評論.
- Murata, Y. 2005. Gender equality and progress of gender studies in Japanese geography: A critical overview, *Progress in Human Geography* 29(3):260-275.
- Murayama, M. 2005. Factory women under globalization: Incorporating Japanese women into the global factory debate. In *Gender and Development: The Japanese Experience in Comparative Perspective*, ed. M. Murayama, 223-256, New York: Palgrave Macmillan.
- Murayama, M. 2008. Re-examining 'difference' and 'development': A note on broadening the field of gender and development in Japan. In eds. Kumagai et al. :227-238.
- Murray, A. 1991. *No Money No Honey: Street Traders and Prostitutes in Jakarta*. Sydney: Oxford. マレー, A. 著, 熊谷圭知・内藤耕, 葉 倩瑋訳 1994. 『ノーマネー, ノーハネー——ジャカルタの女露天商と売春婦たち』木犀社.
- 牟田和恵 2006. 『ジェンダー家族を超えて——近現代の生/性の政治とフェミニズム』新曜社.
- 中野独人 2004. 『電車男』新潮社.
- 中野麻美 2006. 『労働ダンピング——雇用の多様化の果てに』岩波書店.
- 中村 彰 2005. 『男性の「生き方」再考——メンズリブからの提唱』世界思想社.
- 中谷文美・宇田川妙子 2007. 終章. 宇田川妙子・中谷文美編『ジェンダー人類学を読む』世界思想社, 356-375.
- Nast, H. J. 1994. Opening remarks on "women in the field" (Women in the field: critical feminist methodologies and theoretical perspectives), *Professional Geographer* 46(1): 54-66.
- 丹羽弘一 1992. 男性の視点は可能か. 地理 37(10): 78-80.
- 日本女性学会ジェンダー研究会編 2006. 『男女共同参画/ジェンダーフリー・バッシング』明石書店.
- 西岡尚也 1996. 『開発教育のすすめ——南北共生時代の国際理解教育』かもがわ出版.
- ヌスバウム, M. C. 著, 池本幸生・田口さつき・坪井ひろみ訳 2005. 『女性と人間開発——潜在力アプローチ』岩波書店. Nussbaum, M. C. 2000. *Women and Human Development: The Capabilities Approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 落合恵美子 1989. 『近代家族とフェミニズム』勁草書房.
- 小熊英二・上野陽子 2003. 『〈癒し〉のナショナルイズム——草の根保守運動の実証的研究』慶応義塾大学出版会.
- 小倉千加子 1988. 『セックス神話解体新書』学陽書房.
- 岡野八代 2005. 繕いのフェミニズムへ. 現代思想 33(10): 80-91.
- 岡野八代 2009. 『シティズンシップの政治学・増補版——国民・国家主義批判』白澤社.
- 太田 勇 1992. 再論・女性の視点. 地理 37(4): 18-21.
- Pearson, R. 1998. Nimble fingers revisited: reflections on women and the Third World industrialization in the late twentieth century. In *Feminist Visions of Development: Gender Analysis and Policy*, eds. C. Jackson and R. Pearson. 171-188. London: Routledge.
- ロバーツ, G. 著, 小野寺和彦訳 1991. 『開発援助の見方・考え方』明石書店.
- ザックス, W. 編, 三浦清隆他訳 1996. 『脱「開発」の時代——現代社会を解読するキーワード辞典』晶文社. Sachs, W. 1992. *The Development Dictionary: A Guide to Knowledge as Power*. London: Zed Books.
- 佐藤 寛 2005. 『開発援助の社会学』世界思想社.
- 齋藤純一 2000. 『公共性』岩波書店.
- 齋藤貴男 2009. 『強えられる死——自殺者三万人超の実相』角川学芸出版.
- 齋藤 環 1998. 『社会的ひきこもり——終わらない思春期』PHP 研究所.
- 齋藤 環 2000. 『戦闘美少女の精神分析』勁草書房.
- シプラー, D. K. 著, 森岡孝二, 川人 博, 肥田美佐子訳 2007. 『ワーキング・プア——アメリカの下層社会』, 岩波書店. Shipler, D. K. 2004. *The Working Poor: Invisible in America*. New York: Random

- House.
- 杉田俊介 2005. 『フリーターにとって「自由」とは何か』人文書院.
- 多賀 太 2006. 『男らしさの社会学——揺らぐ男のライフコース』世界思想社.
- 橘木俊詔 2006. 『格差社会——何が問題なのか』岩波書店.
- 田中俊之 2009. 『男性学の新展開』青弓社.
- 田中由美子・大沢真理・伊藤るり編 2002. 『開発とジェンダー——エンパワメントの国際協力』国際協力出版会.
- 上野千鶴子 1982. 『セクシィ・ギャルの大研究——女の読み方・読まれ方・読ませ方』光文社.
- 上野千鶴子 1986. 『女という快楽』勁草書房.
- 上野千鶴子 1990. 『家父長制と資本制——マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店.
- 上野千鶴子 2003. 市民権とジェンダー——公私の領域の解体と再編. 思想 955: 10-34.
- 上野千鶴子ほか 2006. 『バックラッシュ! ——なぜジェンダーフリーは叩かれたのか?』双風舎.
- うてつあきこ 2009. 『つながりゆるりと——小さな居場所「サロン・ド・カフェこもれび」の挑戦』自然食通信社.
- ヴェルナー, G. W. 著, 渡辺一男訳 2009. 『すべての人にベーシック・インカムを——基本的人権としての所得保障について』現代書館.
- White, S. 2000. 'Did the earth move?': The hazards of bringing men and masculinities into gender and development, *IDS Bulletin* 31(2): 33-41.
- Willis, K. 2005. *Theories and Practices of Development*. Abington: Routledge.
- Wolf, Diane. L. 1992. *Factory Daughters: Gender, Household Dynamics, and Rural Industrialization in Java*. Berkley: University of California Press.
- Wolf, Diane. L. ed. 1996. *Feminist Dilemmas in Fieldwork*. Boulder: Westview Press.
- 山田昌弘 1999. 『パラサイトシングル時代』筑摩書房.
- 山田昌弘 2009. 『ワーキングプア時代——底抜けセーフティネットを再構築せよ』文藝春秋.
- 山森 亮 2009. 『ベーシック・インカム入門』光文社.
- 湯浅 誠・仁平典宏 2007. 若年ホームレス——「意欲の貧困」が提起する問い, 本田由紀編: 329-362.
- 湯浅 誠 2008. 『反貧困——「すべり台社会」からの脱出』岩波書店.
- ヤング, J. 著, 青木秀男ほか訳 2007. 『排除型社会——後期近代における犯罪・雇用・差異』, 洛北出版. Young, J. 1999. *The Exclusive Society: Social Exclusion, Crime and Difference in Late Modernity*. London: Sage.
- ジーレジンガー, M. 著, 河野純治訳 2007. 『ひきこもりの国——なぜ日本は「失われた世代」を生んだのか』光文社.

付記

文献については、同一著者の著作が日本語文献と英語文献に分かれて配列されてしまうことを避けるため、著者名のアルファベット順に並べた。

くまがい・けいち
お茶の水女子大学

Renovating Gender and Development with Men and Local Sensitivity: My Trial for Gender Studies

KUMAGAI Keichi (Ochanomizu University)